第１８２回　原医研セミナーのご案内

下記のとおりセミナーを開催いたします。多数ご参集ください。

記

日　時：　平成２８年５月１６日（月）午後３時～
場　所：　霞総合研究棟　７階　７０１セミナー室

１．演　題：原爆被ばくに関連する医学記録の再評価
－京都帝国大学原爆調査班資料を例に
演　者：附属被ばく資料調査解析部　杉原　清香　助教

1945 年 9 月、京都帝国大学医学部原爆災害調査班（京大調査班）は大野陸軍病院における被爆患者の診療および牛田地区での集団診療調査を行った。また、その約 1 年後の 1946 年 8 月から 9 月にかけても広島市において被爆者の健康診断を行っている。この際の 600 例以上の診療記録は寄贈を受け原医研に保管されている。この京大調査班による研究成果は、1953 年に『原子爆弾災害調査報告』としてまとめられた。

本研究ではこれらの報告内容を再整理するとともに、新たな視点から解釈し直すことを目的とする。まずは被爆直後の調査集団から 1 年後の調査を受けた症例のみを抽出し、同一集団内における所見の変化を解析した。また、地理情報システムを用い検査所見や症状の有無を地図上へ描画することによる解析を試みた。

原医研には、他にも被爆当時や比較的早期の臨床情報を含む資料が存在する。これらの貴重な資料を再評価し、今後どのように活用できるかについて報告する。

２．演　題：ホルモン誘導によるマウス前立腺肥大モデル
演　者：疾患モデル解析研究分野　藤本　成明　准教授

我々は、マウスに性ホルモンであるテストステロン（T）とエストラジオール（E2）を高用量で投与することで、尿道狭窄を伴う前立腺肥大を誘発できることを明らかにした。このマウス前立腺肥大モデルについて報告する。10 週齢の C57BL 雄マウスに、ペレット化した T または T＋E2 を皮下投与すると、8～10 週間後に前立腺肥大が観察され、T+E2 群では全例で尿道狭窄によると考えられる尿貯留が見られた。組織学的にはいずれも腺上皮の肥大であった。肥大組織では IGF1、PSCA の発現上昇がみられ、特に PSCA は T+E2 群で T 単独投与群に比べ相乗的な上昇がみられ、腺上皮細胞肥大への関与が示唆された。また、エストロゲン受容体 β の関与も考えられた。一方で、前立腺分泌タンパク質発現は減少しており、肥大前立腺では分泌機能は低下していた。このマウス前立腺肥大モデルは、再現性よく尿道狭窄を併発することから、今後 BOO モデル動物としての有用性を検討したい。

連絡先：　広島大学霞地区運営支援部総務グループ　　082-257-1639（内線　霞 6279）